慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

| Title | 阿壠「南京」とその問題点 : 阿壠の文学史上の位置付のために |
|------------------|---|
| Sub Title | Some issues on Nanjing by A Long |
| Author | 関根, 謙(Sekine, Ken) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1990 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.56, (1990. 1) ,p.77- 98 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00560001-0077 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

阿壠「南京」とその問題点

阿壠の文学史上の位置付のために

関

序

根

謙

認したうえで、その数奇な人生について現在知り得ることをまとめ、阿壠の文学史上の位置付けの基礎としたい。 文学的関係のなかで抹殺され続けてきたからである。私はここで阿壠の代表作『南京』を取り上げ彼の業績の一端を確 しそれはこの文学者が取るに足らない無能な人物であったからではない。 阿壠(一九〇七―一九六七)という名前は今までの中国現代文学史のなかでほとんど取り上げられていなかった。しか 魯迅の死の直後から開始された複雑な政治的

からだそうだ。緑原はこの書刊行の際の編集委員であり、この書の「序」は彼によるものである。 で直接お会いし助言を受けた)によると、『南京』という題名だけでは単なる観光案内か地理書と間違えられそうだった 民文学出版社の刊行である。原題の『南京』を『南京血祭』と変えたのは、阿壠の親友で詩人の緑原(同氏に私は北京 正式に出版されたのは一九八七年十二月のことであった。なんと半世紀を経て初めて日の目を見たのである。北京の人 『南京』は一九三九年十月に書き上げられた特異な戦争文学である。 しかしこの書が原題を『南京血祭』と改められ これは阿壠という名

77 —

78 —

だが、 壠の純粋な原作とは言いきれない弱点を持っている。 義を持つものであろうと私は思う。 ものである。 の少尉小隊長として一九三七年八月の上海戦に従軍し、 が最初であった。 壠の作品と前後して、 中華全国文芸界抗敵協会『抗戦文芸』において第一位に入選した作品であり、当時の文壇の話題作だったのである。 京血祭』 なお、 『南京』 演習中に再び負傷し西安で療養生活を送った。 と変えたば 本論は人民文学出版社の『南京血祭』をもとにしているが、人民文学出版社の編集委員会は原作の書名を は九つの章と「尾声」からなっている。これは一九三七年初冬から十二月二十日までの南京を、 この この作品は南京の戦いを中国人の立場から初めてまとめたものなのである。 時期に国民党と共産党の間を渡り歩きながら作品に取り組んだということ自体、 かりでなく、 日本軍による南京虐殺事件をテーマにした作品がいくつか発表されていたが、 文面においても編集委員会の判断で変えてある箇所があると明言しており、 この作品は療養中の西安で自らの経験と見聞をもとに書き上げた 重傷を負って前線を離脱した後延安に渡り抗日軍政大学に学ん 阿壠は中央軍官学校出身 あまりにも大きな意 長編の作品はこれ 多くの登場人 これ 一『南 が 厛 Sp]

前が、

中国文壇のなかでいかに忘れ去られていたかを物語るエピソードだと言える。

だがこの

『南京』

は

一九四〇年の

物を交差させ、時間的な経過を追いながら描いた作品である。次に各章の主な内容をまとめておく。

年学生兵、 第一章・ 五小節からなる。 仏教徒鐘玉龍、 スラム街の人々など当時南京に生活していた中国人が日本軍の猛爆撃のなかで何を目にし、 九三七年初冬の南京。 通信小隊長厳龍 市民たち、 ある老婆とその孫、 軍事 教練中の青

描写。 何を考えていたか、 文化と破壊、 青年の夢と犠牲、 そしてその運命はいかなるものであったかを描く。侵略者への怒りをこめた凄惨極 宗教と現実、 人間とは何 か 中国の運命と方向は何 かに 0 V って ò 四 まりない 壠 0 思 、爆撃の

な

先生など頑固に撤退を拒否している人々に対する説得工作。 破壊しなけれ らない市民の姿を描く。 ŢŪ ばならなくなった知識人出身の青年将校の悲痛な思い。 小節からなる。 松牲、 厳龍の友人歩兵少尉袁唐、 十一月末から十二月初め、 憲兵少尉曾広栄、 日本軍の南京侵入を目前にし南京から撤退し 空き家に忍びこんで盗みを働く中国兵。 焼山芋売りの寡婦、 第五中隊少尉関小陶など自らの手で愛する南 人暮らしの老女、 ってい 青年将校ら か なけ 私塾の老 Ø れ 抗 ば 京

戦争と自らの犠

および阿Q相に関する論争。

: 二小節

からなり、

第一小節では南京の

地形と歴史について美しく展開している。

それぞれ

0

場

所

0

現

時点に

帥 お ン ける防御体制に Ø 建設など万全の準備を整えながらも、 0 煽 動的 にな演説 . つ から首都南京防衛軍司令長官唐生智が誕生するまでと唐生智の野心を描く。 V ても詳しく説明している。 決定的な弱点を内在している防衛体制が読み取れる。 第二小節では南京の中国軍の最高首脳会議の模様を再現し、 兵力や地形、 ともかく、 南京 防衛ライ 「最高統 は防 衛

と付属重機関銃小隊隊長で学生出身の王煜英の心の交流。 章・二小節からなる。 十二月五日の九華山守備隊の 奮戦。 中国の将兵の英雄的な戦いぶりと日本軍の大部隊がそれ 某連隊歩兵第二大隊第六中隊隊長で歴戦 の古強者

塵に粉砕していく凄惨な戦闘

の様を力強く描

体制を完成した

で已むを得ず陣地を放棄するまでを描く。 第五章・二小節からなる。 淳化鎮の王耀武部隊砲兵陣地での戦闘 十二月七日の必死の防衛戦で農民出身の砲兵趙仁寿などがお互い から南京外側 の防衛ライ ンが全面 的に 突破され の確執を乗

ŋ 越えて勇敢に戦い、 肉弾戦において遂に日本軍の陣地占領を阻止した。 しかし、 日本軍はどんどん進んで行く。

袁唐小隊長、 四 紫金 小 節 から 山 0 関小陶 なる。 少尉、 十二月 九日、 教導隊の曾広栄少尉の奮戦。 外側の防衛ラインを突破されて南京城内に後退した中国 浮き足立った中国兵をまとめる努力と、 軍の状況。 間 近に迫っ 光華門

圧倒的な日本軍

中国兵たち 出身であった。 輝く戦友たちへの賛歌 した人々の姿を生き生きと描いている。 三小 の見境の 十二月十一日、 節 か ない ŝ つなる。 敗退ぶり。 この章は 牛首山、 このような中国の風土に根ざした状況に対する作者の痛恨の思いと大混乱の 阿壠の戦死した同窓生黄徳美など三名に捧げら **臆病な農民の無知が日本軍を雨花台へ導いてしまったという逸話と農民出** 雨花台の激戦。 ここでは混乱しはじめた中国軍の姿と、 ħ てい る。 その 黄徳美は なかで戦い 華 僑 0 な を堅持 知 か 身 識

こに め げ付けて同胞を蹴散らし逃げだそうとする中国軍の姿。 街 の姿も描 てあがく軍人や市民のいくつかの逸話。 П 卥 ら挹江門に殺到する人々とそれを阻止する中国軍守備兵の凄惨な小ぜり合 か 0 'n 戦争と中国人、 てお b, 実戦を経て大きく変化した厳龍の姿勢にも触れてい 中国軍の運命を象徴してい 十二日夜、 憲兵少尉蔡子暢が小隊を率いて渡江脱出した際の状況 る。 混乱のなかで同胞によって殺される人々。 なおここでも張涵、 る。 関小陶、 V, 軽戦車まで繰りだし、 袁唐など最後の戦 長江渡し場で船を求 ٧١ 手 を挑 榴弾 作者はこ がむ人々 を投

八章・三小節からなる。

十二月十一日、十二日の南京城内の全面的な混乱。

に投降した二人の兵士の運命。

第二は力強く変化した厳龍の徐州部隊

への戦いの旅。

第三は渡江における張涵

この最

第九章

兀

小節からなる。

十二月十三日、

南京の陥落の当日

から翌日までの

状況を四つの角度から描く。

第

は日

本

長江に逃れ出ようとして中山北路、新 ― 80 -

戦 いと日本の小さな敗北。 第四は死体処理場の老儒者と最下層の中国人、 ある日本兵の奇妙な感情の交流。 そして涙を

流す日本人の描写で終わる。

描く。 尾声・三小節からなる。 この寄せ集めの軍団はただ怒りだけで集結したのだが、道々日本軍をつぎつぎと打ち破り、 脱出に成功した上級将校が敗残の中国兵を搔き集めて撫湖に進撃し、 これを奪還することを 人々から

呼ばれた。こうして十二月八日に陥落した撫湖は十二月二十日に奪還された。

この他に、阿壠の「前言」(『南京血祭』では編集上これを「後記」として全体の最後においている。)が付され

全体としては約三五〇枚十四万字におよぶ長編の作品である。

述べている。(以下の本文における引用はすべて拙訳によるものである。) まず、この作品がいかなるジャンルに属するものであるかを確認したい。 阿壠はこの 「前言」において、 次のように

うことが往々にしてあり、私がそれに色を塗り、 ている。しかしここには虚構の物語もあるのだ。 ここには (『南京』には) 真実の話と、 他から持ってきた真実の話があり、 血肉をつけ、一つの構想にまとめざるを得なかった。 とりわけ、資料の収拾が極めて困難で、真実の話は輪郭だけとい かなりルポ ルタージ これはまる

で小説の方法だ。こうして私はこれをルポルタージュとすることも小説とすることもできなかった。

「ルポ あ た胡風は ルタージ から阿 .壠がこの問題について 自分自身かなり 悩んでいたことがわかるが、 「リアリズムの精神を把握し、 に重きを置いていたことが伺える。 主観の激動のままフィクションに走らないように」と繰り返し注意を与え しかし阿壠の文学の師であり、 作者の意図としては、 その後一貫して運命的 真実を伝える

ュ

声 六、 る。 五, に複雑な問題であるので、 詩人としての阿壠については本論で詳しく述べる余裕がないが、この指摘は阿壠の文学の本質をついている。 て、 は主要な登場人物の関連性がきわめて薄く、章によっては完全に独立してしまっているからである。 0 い これは怒りに駆られた詩人が猛烈な 勢いで筆を 走らせ書き上げたものである。 ていたという。 混合したものとみることも難しい。 にお 阿壠 八章の兵隊たちが含まれる。 個人の 次のように指摘している。 八章)ら学生知識人出身の青年将校。 作品 け ず は 'n Ś 主観的な情緒が小説にとって不可欠であるはずのリアリズムの精神をかなり抑えてしまっているのである。 中間的な人物や縁故を持ってきて、 の登場人物を大きく分けると四つの群像を見ることができる。 にしても、 「将軍」もこのグループと見られる。 全体として 非ル これを長編小説としてみることも、 人民文学出版社はとりあえずこれをルポルタージュ風長編小説 「少なくともこれ(『南京』)は小説ともルポルタージュとも言えない印象を人に与える。 ポ 第三は描写は少ないものの、中国軍の最高首脳、上級将校(第三章)の群像であり、「尾 ルタージュ 何よりも、 第二は張涵 (第四、 的な傾向が これらの登場人物を結び付ける努力をしているが、 一貫した「長編」とすることにそもそもの無理があると言える。 第四 は 明らかだったのである。 一般の市民農民の群像 長編ルポル 八 九章)を中心とした農民出身の将兵。 タージュとしてみることも、 第一は厳龍 別な観点から言えば、 (第一、二、 緑原は (第 一、 『南京血 (報告文学体長編小説)として 九章) 袁唐と曾広栄 七、 八、 祭 残念ながら必然性が そしてこのふたつ 九章、 0 ここには第四 この作品に に

読

れ

そしてこの他に、

独立性の強い章として第三、五、

七章と尾声をあげることができる。

このようにこの

作

品では み取

ある特定の登場人物を絞りこむことができないのである。

言うとこれらに若干の一貫性を認められるが、

これもやはり決定的な要素とは見做すことができない。

ただ最初に述べたように

「時間的経過」

つまりこの作品 観点

者 は の怒りをもとにした複雑な思いである。 くつか の短篇と中編の集合体なのである。 阿壠は次のように言っている。 そしてこの集合の結合剤となってい るのは、 「南京の陥落」

によって小説 て、 げることはできない。歩兵も彼であり、砲兵も彼であり、淳化鎮の戦いにも彼がいたし、雨花台の戦いにも彼が のもので、 争はけっしてあるひとりの英雄の業績ではなく、 小 Ó それでは私 渡し場の守備兵にも、 角度から、そしてそれぞれの分野から、 カ .のまとまりを探った。これはしかし私の向こう見ずな試みに過ぎない。 しこの本で私は、 ひとりひとりの将兵 石の作品 の情感を一貫させるという技法を放棄し、逆に事件によって、 の情感を支離滅裂にしてしまえばいいのか。……それもできない! そのようなこと(ある主要な登場人物を決めること)ができなかった。 渡河の兵士にも、そして戦車との肉弾戦にも彼がいたではないか。 (の血肉のなかに内在するもの その全貌を描かねばならなかったからだ。しかも事実として、 少数の人間の壮烈な行為でもない。それは全民族、 なのだ。 私には、 戦争によってこの情感を貫いて、 (阿壠「前言」) ひとりあるいは数人の英雄を作り上 どうすべきか。 南京の戦 中国 いでは、 私は人物 人民全体 抗 戦

込められてい 体裁の であるし、 面 個の からも、 るか 第二と第四の群像はかなり 「小説」としているのは、 この一貫性の欠如がかなりはっきり認められる。 らである。 また一つの本の出版という観点から見ると、 第一 「小説」 0 群像の描写が非常に強烈であるためであり、 の要素の強い 「ルポルタージュ」と言えよう。 第一と第三の群像についてはほとんど完全な「小 この一貫性の欠如の ここに作者の 問題についても一 しかしこの作品 主 要な情感 九八 をと

壠

ば

六年の最終的な編集において複雑で困難な要素がなか

ったとは思えない。

後に詳しく述べるが、

これは作者の死後

九六七年に獄死)二〇年を経ての出版であり、

生前にこの作品の手直しを作者が行なえるような状況でなかった

– 83 **–**

烈な印象が原初的なまま強引に一つの作品としてまとめられてしまっ て訴え掛け このような初歩的 てくる阿 壠 0 な問題を解決できないまま出版せざるを得なかったのである。 思い は些 一か とも損な われ てい ない。 ここに私は二重の意味で作者阿壠の無念を感じる。 たのだ。 こうした弱点を持ちながら だからそれぞれ の群像 読者に :つ強 忲

本軍 生き方を徹底的に描き、 侵略に対する民族的な怒りがあげられるが、 は 次にこの作品 ない。 'n 攻勢のさなかにあって、 b ちろん の主 日 題について述べる。 1本軍の その なか 残虐性 阿壠 から は中 につい 明日 大きく作品全体に網をかぶせたテーマとしては、 国 ては鋭く描 の抗日戦争の力を導きだそうとしているのである。 の勝利を確信し、 この作品は単 カュ れ てい 純に日本の残虐な侵略を告発し日本軍国主義を批判する作品 この作品を通じて明日 るが、 それ以上にこの作品 からの新たな戦いを呼 南京事件を頂点とする は南京戦 国共合作が破れ だ直 面 び した中 掛 けて 百本 る

Q 犠牲にしなけ 主義 を現実の れば ものとして認めたうえで、こういう一切の誤謬が残虐苛酷 .勝利できないという冷厳な事実を主題にしている。 そして中国特有の悲観論や楽観論 な南 京戦 0 なか で検証 され、 人一人の青年 享楽主義

抗日戦争の意義を前途ある中国の青年の立場から考えたもので、

圧倒的多数である農民出身の 将兵の 物語で は、 伝統的な中国人の忌むべき性格と中国 っ 軍 隊 0) 実状を冷静に描

悲痛な思いを心の奥に畳み込んで大きく成長していく姿を生き生きと描い

てい

け

が

自

らの

弱点をのり越え、

0)

主

一題を中心に

して、

それぞれ独立した群像に対し少しずつ違ったテ

ĺ

7

が与えられ

ってい

る

自分の青春のすべてを

陌

第 だ。

知

識人の物語は、

伴うものであった。 た土壇 ぎりぎり |場に彼らを追い込んだのである。 土壇 一場でなけ かも伝統的な行動様式にしたがって、 ĥ ば 発揮 され しかし多くの場合、 な V١ 中 国 一人の物 凄 この最後の力さえ出し切れず悲惨な最期を遂げるものも その迫力の発揮はあまりにも遅く、 V 迫力を主題に して V · る。 南京 0 戦 むやみに多くの V は 民 族の存続 を賭

まりにも多かったのである。阿壠は容赦なくこの暗黒を切り開いている

姿が描かれ 題となる。 第三の中国軍最高首脳 しかしこの物語はページ数も少なく唐突な感じがして描写に失敗している。 ている。 前者は彼らの腐敗と野心を冷ややかに描くもので、 上級将校の物語は第三章と「尾声」 の二箇所にあるものだが、 後者は民族的な怒りに燃えた将軍の英雄像が きわめて対照的な上 一級将校

悲 0) わ 痛 真相を力をこめて描いたものである。 れていくことが主題となっている。これはいくつもの関連性のない逸話の集成であるが、 第四の市民農民の物語は、 (な叫びと共に伝わってくるような高い完成度を持ってい 彼らが残虐な南京戦の最多数を占める犠牲者として生命財産、 特に第一、 第 二章の人物像は凄まじい迫力があり、 る。 さまざまな角度から 侵略戦争の犯罪性が作者 そして夢や希望の 切を奪 犠牲

の概要は以上である。 次にこの作品の中からいくつかの問題を提起し、 阿壠の文学の理解を深めたい。

_

虚構性について、 この作品 一の中 -から当面三つの問題を論じたい。 第三に創作と出版の背景についての三つであ それは第一に阿壠に見る中国の現状認識について、 第二に

の

詩的とも言える一 第 0 阿壠に見る中国の現状認識についてであるが、 節があるので、 まずこれを見てみよう。 第一 章の中で空襲警報のサイレン音を描写した次のような散文

この音はいったいなんなのだ。

まり、 し次の瞬間 それ 低く低く沈ん は、 大空を荒 それ ħ 0 はまた威 でいく。もの寂しく絶望的な余韻と瀕死の苦悩の鼻音が、 狂 月 って駆けめぐっていく。 飢えた狼が食物を求め 地上に不安を播き散らすの (嚇するような響きを帯びて吠えはじめる。 そして己れ て吠えている声 の欝屈、 だ。 貪婪、 低く抑えてずっと遠くから起こり、 神を叱責し、生命を叱責し、そして一切を叱 残酷をあらわにして空漠たる原野 いつまでも耳の底に残っている。 そして急に しか

責して人類を戦慄させ、

だ

歴史を、 くのを眺 度も水中に 落とし、捉まえては打ち、押さえつけた。恐竜の剛健な力はここでは逆に疲労の蓄積と変わり、 ももっと大きな拳士だった。 じめたが、 ながら、 叫び声をあげた。 牙で自分に嚙みついた。そして、 けなかったし、 あげて、 時間と空間に この音はまた、 彼は考えも及ばぬ遠い所を目指して、大きな岩を一つ一つ飛び越しては逃げながら、 自分の岸辺と大陸を見つめた。 やけに めてい 大風によって吹き飛ばされてきた岩と、 自分と仲間 没した。 水はその手に流れ来てはたちまち流れ去り、巨大な体のどこにも力の入れようがなかった。 向 退こうとも思わ . るの 重い尻尾を振り立てた。 かい訴えかけた。 古代の恐竜の絶叫でもある。 あるものは、不安に轟 もはや海に沈むしかなかった。このとき彼はもう一度海 か の歴史を決定しようとした。 それはゴムマリのように彼をもてあそんだ。 あるものは、 なかった。そして両目を血 憂愁、恐怖、 世界はこんなに平静に、この巨大な生物が、 挑戦しなければ 自分の位置へ、今までの平和と自由の生活へ戻ろうとして本能的 :く海の波に巻き込まれた。そして打ち衝けるような強い力に窒息させられ 体には何の災難も受けなかったが、 地層が崩 憤怒や辛辣な感情に惑乱されて、 こうし 地 の裂目 れ て続けざまに幾度も、 ならなかった。 走らせ、 から噴き出してきた溶岩に襲い たとき、 荒々しい柱状 あるもの そして格闘しなければならなかっ 空に投げあげたかと思うと、 は、 面に首を突き出 この変異に激しく怒りその爪 大きく轟 世界の末 真っ青な虚無の大空に助けを乞う 火 の熱い鼻息を吹き、 山に焼か き渡る雄 日の到来以前に絶滅 カコ かった。 爪で自分を引き裂き、 れて身体中を炎に 最期の 叫 その口もすでに幾 をあげた。 鋭い牙をむき 波は 声をあ 固 に泳ぎは 地 してい は退 面

のときの

Ý

1

レ

ンとは、

このようなものでは

なかっ

たか。

る。 後に置かれていることの意義は大きい。 そして阿壠 の 戦 ٧١ . の呼 び声 、はここか ら発せら つまり このような絶望的な感覚が 全体を支配する 情緒となっているからで ń ているのだ。

確信を表明してい

るのである。

カュ

題はこんなに簡単ではない。

阿壠はその

「前言」

の冒頭において毛沢東の

「持久戦論」

に対する熱狂

W 0 に でいる。 理 確立している。 益論 事 前 ば 要素ある 日光だ。 勝 敗北主 利の曙光はほのかに中国の軍旗を照らしはじめている。 これには歴史的不朽性があり、 V は経済的要素、 義 は月を眺 政治的要素のどこから見ても、 めては喘ぐ牛に過ぎないが、 prometheus 的偉大さがある。 この 持久戦というこの理論は、 理論は客観的存在の必然性 これらはみな鉄のように有力な事実だ。 敗北主義は消え残る霧であり、 すでに金字塔のよう をしっか りとつか

勝利の確信と前述の現状認識の間には大きな隔たりが ある。 作品 のなかで勝利 の展望を基礎に描 7 る のは

これ

ツ

すぎるという批判があったが、 カン カュ る。 の価値は、 ないという、 6 の鋭い認識と、 の描写が関連性を持たずに現われ、 問 題点は作 このきわめてかすかな光を自覚しつつ、 阿壠の最低限の希望だけは、 のような理 理 品 は論への の 虐構性につい 論に基づいて現実から勝利の道を導きだすことにあるのではない。 「確信」が当時の作者のなかに同時に存在し、 緑原の「序」 てである。 結果において成功と失敗がはっきり別れたという事実は注目に値すると思う。 悲痛な現状の描写の隅から光を読者に発しているのである。 にはこの作品が当時出版できなかった理由として「あまりにも真実過ぎる」 前述のようにこの作 鋭い現状認識に 基づいて悲惨な現実を 徹底的に描写することに 品には ルポル しかも同じ作品のなかでこのふたつの方向 タージュとしてフィクショ しか Ļ そして阿壠文学 このような現状 ンに走り

88

戦闘 の場 面や死体の状況などの残酷さと爆撃の悲惨さが、 この評価 の分裂は、 同氏が私に語ってくれた所によると、「あまりにも真実過ぎる」 第一の問題と密接に関連するものである。 抗日戦争を継続するうえで中国人の戦意を阻喪させる」と

ということは

1

ということがあったと書かれている。

ン性が強すぎるという批判は、 このような分裂した評価が可能なのは、 二つの方向を指していると思われる。 言うまでもなく、 作品自体が一貫した統一体ではないからである。 その一つは、 第三の群像である 上級将校の描 フ クシ

写、 うことについては疑問である。阿壠はその『詩と現実』の中で次のように述べている。 描写についてである。 粗雑さが見えすぎるのである。 あるいは勝利の確信を指し示した部分に対してであろう。この部分は現実から遊離していて、たしかに作りも これがかなり高度な小説性を持っていることは間違いないのだが、 これは第一の問題のなかで明らかである。 もう一つは、 第一の群像である青年 批判の対象になり得るかとい のの

先鋭化するものなのである。 情緒における「真実」とは、 ているからこそ、この芸術はその反発作用として有効かつ充分に「真実」の情緒を保証するのである。 このような誇張した芸術の完成は、「真実」の情緒を前提として初めて保証される。 そして これによって成り立 (「誇張片論」より) ある情緒の突出のことである。 それは高揚して燃え上がるものではなく、 集中し

には彼の「真実」がなかったことになるのである。 「真実の情緒」 たことが言えないけれども、 V 存在しな たのである。 Sp] 『南京』は生まれなかった。 権は 「事実」 - ある人物を創造することが、かえって南京戦に直面した中国の「真実」を正しく伝えることになると思って という観点から考えると、 ジ ヤ を羅列することが「真実」になるとは思っていない。「真実の情緒」を前提とするならば、 ン 、ルについての引用からもわかるように、もしこのような創作態度がなかったならば、 阿壠はこの部分に対する 批判に対しては 明確に反論したに違いない。 具体的な批判がどこに対して行なわれたのか、 第三の群像や勝利の方向の描写が失敗していることは、 現在私は確認できないので、 取りも直さず、 そして阿壠のこの はっきりし 現実には

次に「あまりにも真実過ぎる」という批判については、

阿壠のみならず、良心的な中国の作家であったなら、

だれも

- 89 -

いては、このような政治的な発想のない作家は日の目が見られないのだ。 実過ぎる」という批判は、 返す言葉がなかったと思う。これは完全に政治レベルの問題であり、 阿壠にとっては成功の裏付けに過ぎず、 批判になり得なかったに違いな 文学論の範疇に入らないからである。 問題は阿壠が意識してか、 V) 無知 ただ、 カュ そして「真 6 中 が 玉 この に な

冷厳な事実を拒否したことにある。ここに私は阿壠の文学者としての良心を確認できると思う。

ジ

が、 のだ」と認めざるを得なかった。そして恥じた。 ということが彼を驚かした。 六万字というか 婦と交流があり、ここから火野葦平の新作の話を聞いたのだが、この作品が杭州湾から除州への進撃をテーマとし、十 最後に創作と出版の背景について 説明したい。 特に火野葦平の『麦と兵隊』 なりの分量を持ち、 彼はこの火野葦平の作品 が彼の創作意欲をかき起てたものだったという。 作者が通信兵として「一発撃っては一筆書き継ぐ」 阿壠の前言によると、 の 内容の如何を問 わず、 日本の石川達三と 火野葦平 これが 阿壠は日本人の鹿地 「中国の作品と作者を凌駕するも という創作態度を堅持していた Ó 豆 ル ポ 池田幸子夫 ル ター

は恥じた。 しかし執筆者の立場から 恥じたのではない。 たしかに私は ルポルタージュを書いたことがあった

私は恥じた。

自分自身を、そして中国人としての自分を。

が、 そして慚愧の後に憤怒がやってきた。 私は銃を持つ人間として、まだ完全に銃を下ろしていない人間 の立場から恥じたのだ。

私は信じられない。「偉大な作品」が中国に生まれず、 日本に出現したということを。 そしてそれが抗日戦争に

生まれず、 侵略戦争に出現したということを、分量と創作態度のことも、 私を非常に不快にした。

恥辱だ!

90

出版で 様 地、 作 という数字が間違って れてい 字であるが、 カコ は残虐な日本侵略者の類型的な描写は一 日本に対する理解が、 げている。 とって執筆は一 しても、 を描 O の姿勢を改めて の作品の出版の背景として残る疑問 池 ル 原によると阿壠は さ、 ポ 田 あるか てい 夫妻との親交や胡風との関係を通して、 阿壠が日本の従軍文学者の姿勢から強烈な刺激を受けていたことは興味深い。 ル タ この猛烈なスピードに阿壠の強い決意が 感じられる。 なんらかの事情でどうしても発表できなかったということなのだろうか。 緑原 5 1 るのである。 種の戦闘 ÿ 原作の半分が紛失してしまったということなのであろうか。 ュ は原作が 確認し、 の中にも認められる傾向である。 V) この作品に単純な日本攻撃の く闘だった。 『麦と兵隊』 たのだろうか。 単なる文学者としてではなく戦闘を続ける人間として『南京』 これは、 「三十万字」 執筆開始から完成まで二か月ぐらい この作品が書かれ を読んだということだったが、 今、 あったと書い 箇所もない。 は、 まだこれについての明確 この作品の原作についてである。 阿壠が日本に対する理解を深めていたらしいということである。 「南京事件批判」とは違う性格をもたらしている。 てい た前年、 阿壠は日本兵の人間的な側面に注目し、 る。 これは阿壠の死後二十年、 一九三八年に文芸雑誌 日本人との関係でもう一つ指摘したいのは、 「前言」 な答えはな しかかかってい の中にはその記述はない。 前述のようにこの作品 それとも、 ない 『七月』 あるいははじめから そして阿壠はここから自己の 作品 何 し、 に取り組んだのだった。 か 別の 倫理 早 い に発表された彼の の完成後五十年を経 ことがそこには書か 一的に自ら Ъ Ō は三五〇枚十 この は か 敗 作 日 品 で書き上 れ この す 7 この くつ 中に 彼に れに て 四 V١ 鹿 万 創

この他 阿壠の文体と言葉の感覚について述べたかったのだが、 紙数の都合で、 次の機会に回すことにする。

な 阿 . 0)]壠の伝記は書かれていない。 である。 しかしとりあえず、 その名誉回復(一九八〇年)以後何人かの友人の書いた阿壠についての回想ぐらい 不明な点はそのままにして阿壠という文学者の横顔を描こうと思う。

九三九年まで、(3) 以後新中国成立までの十年間、 冏 .壠の人生は五つの時期に分けられる。 それは (1) 二○歳代前半の一九三二年頃まで、 (4) 一九四九年から逮捕された一九五五年まで、(5) 獄死する一 (2) 二〇歳代後半から一

九六七年までの十二年間、という五つの時期である。

ず、 諾が必要だった。 この店は猛烈なインフレのために倒産し、 教えてもらいながら年季奉公をする徒弟であり、 阿壠十八歳の時 された。 名は陳守梅。 里で私塾に通い伝統的な詩文を学んだのである。 1 家業の手伝いなどの労働に追われることとなったが、 は阿壠の少年から青年にかけての時期である。 そして私塾を辞めた後も、 陳家の詳しいことはわからないが、貧しい家庭だった。しかし、最低限の教育は受けることができた。 阿壠にとって、家や父という存在は絶対のものだったのである。 親戚の紹介で杭州の絹織物商店に 「学徒」として勤めることになったのである。「学徒」とは技術を 独学で詩作の勉強を続けた。 彼の独立の甘い夢は簡単につぶされてしまった。新しい道を探すにも父の承 学生のことではない。 その後、 一九〇七年二月、 経済的な事情と父の強い希望でこの私塾を続けることができ 阿壠はこの私塾で伝統的な詩の美しさを発見し、 やがて阿壠の故郷を離れるときがくる。一 ここで彼は二年ほど仕事をしたらしい。 阿壠は杭州郊外の普通の家庭に生まれた。 彼は独立の道の前に立ち、 九二五年、 これに魅了 しかし 郷 本

92

そして自分の芸術への夢の矛盾に苦しみぬいた。

この苦しみの日々にも詩作は休みなく続けられ、

やがて

阿壠はその旧

体詩を杭州

の

新聞に発表する機会を得る。

そして好運にもこの詩が一

定の評価を得て、

小

額ながら原稿料

を手に

時的に

軍服

がを脱い

頃、

これ あっ たが、 は 彼の 民 基本的には軍人の身分で複雑な環境の中を戦い続けた。 一族的 な情熱を証明する事件以外のなにものでもない。 以後十五年間、 阿壠は

なが 薇花藕」 5 の時期は、 ではなく、 その特異な創作をつぎつぎと発表し、これらが文壇の注目を浴びた時期で 一九三七年の第二次上海事変を頂点として、 抗日の情熱に燃えた激しい自由の詩人として、 阿壠が実際の戦闘に参加し、 上海の文学雑誌『文学』に登場したのは、 **、ある。** 彼が 社会の実相に深く関 「鴛鴦蝴蝶」 を歌う「紫 九三五

衡 派遣された。 にしていたのである。 校に残ってい 論争の場で 年のことだった。 `あり、 た 上海へ自分の小隊とともに移動し、 中央軍官学校学員S・M・というのが、 阳 青年阿壠はその中で大きく成長していった。 壠 そして一九三七年、 は国民党の腐敗の実状を肌で感じていたが、 阿壠は軍の命令により日本軍の攻撃を目前に控えた上海に少尉小隊長として 八月十三日抗日の最初の一 その時のペンネームだった。 また在学の年数からもわかるように、 抗日の戦いに軍人としての力を発揮する日を心待ち 発を撃つまでのことは、 一九三六年の上海は多くの文学 __ 阿 九三八 | 壠は卒業後も学 年 湖 面 南

はじめ、 まま彼は たらし 撃たれる重傷を追 Ш で 書 かか 長沙など各地を回り、 攻撃から防御へ』 後に阿 ħ た ル ポポ 壠 V ル は 戦線を離脱した。 詩 タージュ Ø なかで、 などいくつかのルポル 『閘北は撃ち始めた』 九三八年 この負傷を自己の 具体的な負傷の状況については少し食違いがあるが、 のはじめ タージュと多くの政治詩を胡風の主催する文芸雑誌 湖南の衡山に辿りついた。 の中に、 「再生」 の起点として捉えてい みごとに描かれ てい この地で前述の る。 . る。 しかしこの戦 徹底した治療が受け **頻から下顎を撃ちぬ** 『閘北は V 撃 で 『七月』 ち始 阿壠 ø Ś は顔 に精力 た れ な か

を

れ

の時 時期は、 『七月派』の文学者として名声を高めた時期であり、 政治的には国民党の軍人でありながら 共産党に

民党の

制圧する地域を突破して行くという困難な旅であり、

古傷を持った阿壠にとって非常に苦しい

、旅だっ

阿

.壠

これほど共産党に憧れを持ってい

た彼だっ

たが、た。

終生共

その詩や小説のはしはしに表れている。

産党員には

ならなかった。

情熱的である一方、

容易には同調しない彼の性格がここに見える

延安に対する憧

球を突き刺したらしい。 演習にも傷を押して参加していた。 実際に接した。 級情報を流し これ 阳 |塊は延安で抗日軍政大学に学んだ。 は後の彼の詩 つつ複雑な戦いを展開した時期である。 彼の感激は大きかったと思うが、 論などに明確に表れる。 それにこの頃には顎から奥歯にかけての古傷もひどく化膿していた。 そして再び負傷するのである。 時間的には数か月しか延安にいられなかったが、 阿壠 そこで学んだものの すべてに渡って 完全に納得したわけでは はきわめて誠実な学生で、 そして 彼の人生の悲劇 この負傷についても異論があるが、 座学はもちろんのこと、 め 始 なりのの 時期でもあ ここで彼は共産党の 延安での治療は無理 つ どのような軍 演習中に草で眼 た な 九三九 軍 一であ か 隊 つ

カュ

心に、 書き上げてい れ は H 詩を中心に行なわれ、 々を送る。 出版された。 冏 **- 壠たちは活発な文学活動を展開** 彼の たが、 ンスパ また成都においては文芸雑誌 出版できない イ活動について発表されているのは 彼の政 治詩の まま散逸してしまっ 大部分は Ĺ 知識層に大きな影響を与えたのである。 『呼吸』を出版した。 この時期に作られてい た。 九四 緑原が回想の 四年 散文の面では Ż る。 は 胡 な これらは詩集 かで語 風も重慶にきており、 ってい 『希望、 『無弦 るもの 我にあ 0 一つだけである 琴品 『七月』『希 り』という散文集を 望 を中 創 作 作 0

離 た。 た。 れる決心をする。 翌四七年 自 殺 九四三年 0 原 五月に 因 'n は 明 ことである。 子供を亡き妻の実家に預けての傷心の旅路であった。 は 6 か 阿壠 でない。 のペンネームを使った反政府活 冏 彼女は 壠 はこの女性を心から愛してい 阿壠に癒されぬ心の傷と七か月になる男の子を残した。 動が露見し、 たらし V 以後、 逮捕が目前に迫った。 が、 南京、 九四六年にこの 上海、 杭州一 こうして阿壠 新妻は自殺してしま その子の 帯で逃亡生活を送 名 は は 陳 成 沛 都

この時期

に阿阿

壠

は結婚をしていた。

妻となったのは成都で知合った十六歳年下で二十歳の張瑞という女性だっ

る。 ても鋭い批判を展開した。 こういう困難な時期にも彼の筆は鈍らなかった。 彼は伝統的 |封建的な文芸の批判の先頭に立ったばかりでなく、 阿壠の詩論は、 延安の文芸と国民党統治下の文学の対立を表すものである。 特にこの時期で注目されるのは、 『白毛女』 などの 山歌や民族形式重視の文学に対し 詩人で翻

権と結び付いた文学者たちと容赦のない論争を続けた。 一論的 な深化は直接 (4) の時期につながる。 新中国 そしてこの論争は一歩一歩阿壠を絶壁に追いつめ の 成立は阿壠にとって新しい戦い 胡風派芸術論の論客として注目を浴びた。 0)開始で、 あ った。 ていくのであ 彼は

羅洛は「空白といわれる四〇年代中国の詩壇を、

阿壠は理論の面から埋めた」と阿壠を評している。

が けら 次の数点である。 争の内容につ れるまで天津文学工作者協者の編集部責任者だった。 を着せられ、 この時期阿壠は、『人と詩』『傾向性を論ずる』 間もなく文化大革命が始まりこの判決は無効となって引き続き拘留されることとなった。この間毎年子供 最初 社会的に抹殺された。いわゆる「胡風批判」である。 'n から謀略的に敗北の予定された虚しい戦いであっ てはもはや語る余裕がないが、 逮捕は一九五五年五月だった。 最終的にはこれは文学論争ではなかっ 十年後の一九六五年に正式な判決として 禁固十二年が などの詩論を発表し、 (5)の時期については資料がほとんどない。 た。 この時期彼の活動は天津を中心に進められ いくつか の計画的な争点を経て、 た。 これは政治闘争として位置付 わ カコ 阿壠らは反革命罪 0 ていることは 渡された の写真を

見ることだけは許されていて、

一九六三年息子陳沛に宛てほ

てそのまま手紙を獄中に返送した。

もとに届いた。

この時も息子は遂に見舞いに行く勇気を持てなかった。文化大革命が激化していたからである。

一九六

陳

九六六年公安局から監獄病院に入院した父を見舞っても良いという通知が

んの数行の手紙を書くことができたが、

息子は後難

を恐れ

97

政

七年三月二十一日、 妻の命日の三日後、 阿壠は脊髄カリエスで獄死した。こうして阿壠の無念は永久に閉ざされた。

九八〇年 「胡風反革命集団事件」 は正式に撤回され、 全員の名誉が回復された。 しか ï この事件にまつわる話は

*

その後もまだ正確には語り始められていない。

であるのだが、 れた文学者については、 本論は阿壠についてほんの概略を述べたに過ぎない。 中国ではここに述べた阿壠のように優れた資質と特異な業績を持った文学者が、 その発掘がきわめて難しい。現代文学はもともと一つの混沌であり、 中国現代文学において「左」の側から各種の「整風」で抹殺さ 本来多くの花を結ぶも 硬直した理念と空虚な

「彼ら」は確かに存在し絶望の淵に美しい花を咲かせていたのだ。この小論を以てその一つの証としたい。 またこの傾向あるが故に、すべての現代文学を等質のものに見做し、 一括して否定する見方も生じている。 しか

政治運動によって、

わずかな作品しか世に残せずに消え去ってしまっている。

九・海峡文芸出版社再版)の耿庸による「後記」、阿壠『人、詩、現実』(一九八七・七・三聯書店)の羅洛による「序」、 なお、本論内に引用した各文献の他に、緑原著『葱と蜜』(一九八五・一二・三聯書店)、阿壠『第一撃』(一九八五・

『胡風雑文集』(一九八七・一二・三聯書店刊)、 李輝著 『胡風集団冤案始末』(一九八九・二・人民日報出版社)、 劉献彪

『中国現代文学手冊』(一九八七・八・中国文聯出版公司)などを参考にさせていただいた。

98 —

特に魯迅の死後はこの傾向が急速に進展